

たらけり、集又光仁紀にもつ、む事なくと見えたり、恙は憂也とも病也ともいへば、病憂のつ、ましげなるよりいふ詞成べし、萬葉集に草づ、み身疾あらずといへるは、上古の時草居露宿す、恙といふ虫ありて、よく人の心を食ふといへる説によれる成べし、

〔玉勝間 十二〕つ、みなく又つ、がなくといふ言

萬葉に、つ、みなくといふ詞あるを、後世俗には、つ、がなくといへり、此言、から書に無恙といへると、こ、ろばへ同じき故に、いにしへより、此字をあてたりと見えて、萬葉十三にも、恙無と書たり、これを今本には、つ、がなくと訓たれど後の言なり、かの集には、此言皆つ、みなくといへれば、これも然訓べき也、さてから書に無恙といふ言は、憂也病也と注し、又風俗通に、恙噓蟲能食人、心、古者草居、多被此毒、故相問勞曰、無恙、といへるに依て、つ、がといふをも、虫名とこ、ろえて、此言を件の説によりて解くは、いみじきひがことなり、漢籍の恙も、憂也病也といへるは、こともなく聞えたるを、虫の名とせる件の説は、いと信がたきを、まして皇國にて、つ、がなくといふは、かのつ、みなくの轉れる言にて、つ、がは、さらに虫の名にはあらず、たとひから書の恙は、まことに虫名にもあれ、それにはか、はらぬこと也、無恙の字をあてたるは、たゞ相問ていふ心ばへのよく似たる故のみにこそあれ、萬葉には、つ、むことなくとも、つ、まはずともいへるを以ても、虫の名にあらざるほどを去るべし、同集六に、草管見身疾不有とよめる、草といへるは、かのから書の草居云々の説によれるかと思ふ人もあめれど、然にはあらず、此草字は、莫を誤れるにて、これもつ、みなくなるをや、さてつ、みといふ言の意は、大赦後釋にいへれば、こ、にはもらしつ、

〔時還讀我書上〕越後新潟ノ邊ニ一種ノ病アリ、土人海ニ近キ河畔ニテ草茅ヲ刈トキ、身中忽ニ蟲ニ螫ル、コトアリ、其蟲至テ細ク毛髮ノ如シ、螫ル、時ハ寒熱ヲ發シ、恰モ傷寒ノ如シ、土俗レヲ呼テツ、ガト云フ、前年ハ不治ニ就モノ多カリシガ、近來ハ治方ヲ覺エテ死ヲ免ル、者